

牛久助郷一揆

大久保 京子

〔抄録〕

文化元（一八〇四）年に牛久宿で起きた牛久助郷一揆については、小室信介編『東洋民権百家伝』の第三秩に掲載されたことで世に出るまで、その地域ですらほとんど知られることがなかった。また掲載された後も、顕彰活動が起ることもなく、研究もいまだ地域的なものとどまっているのが現状である。本稿は牛久助

郷一揆の紹介と、義民として近代以降も活用されていくのに必要な条件について考察する。

キーワード 牛久助郷一揆、牛久助郷騒動、佐倉宗五郎、東洋民権百家伝

はしがき

一揆や騒動、事件後に義民として供養された人物は、近代に入り、時に民権運動の民権家として、時に忠君愛国の祖として、その時々メディアに取り上げられるようになった。明治十年代においては新聞や書籍がその中心となっていた。

文化元（一八〇四）年に牛久宿で起きた牛久助郷一揆^①については、明治一七（一八八四）年発行の小室信介編『東洋民権百家伝』の第三秩に掲載されたことで世に出るまで、その地域ですらほとんど知られ

ることがなかった。また掲載された後も、顕彰活動が起ることもなく、研究もいまだ地域的なものとどまっているのが現状である。

本稿は牛久助郷一揆をとりあげること、義民として近代以降も活用されていくのに必要な条件について考察する。

第一章 牛久助郷一揆

第一節 研究史と課題

牛久助郷一揆を伝える記録は、五系統二一の写本の存在が明らかになっている^②。騒動に関する記録は「義民伝」、あるいは「騒動記」「物

語」「夢物語」で流通することが多いが、牛久助郷一揆もまたその通りである。

最も古いものとされているのは、『常久肝胆夢物語』^③である。文化二（一八〇五）年成立とされ、現存しているものは明治一六（一八八三）年九月の書写のものと、文政一一（一八二八）年のものがあり、一揆勢の動向を中心に描かれている。物語は常久という僧侶がみた「不埒な夢」を書き集めたものという形をとっている。

現存件数が最も多いのが、『牛久騒動女化日記』である。現存しているものは全て写本であり、文政八（一八二五）年の書写版が最も古く、明治二二（一八八九）年成立の写本まで数点現存している。こちらには取り締まる藩の対応を中心に描かれている。

『女化原夢物語』は、文久三（一八六三）年書写版が現存している。「廻国の修行者」が訓馬の村原を通りかかり、老女が食べ物を煎焚している光を見つけて一夜の宿を乞い、そこで助郷一揆の話を聞いたので書きとめようとした時、既に夜は明け、気がつけば老女の姿はなく、家だと思っていたのは女化稲荷の社頭であった。ここから、『女化原夢物語』という題目になったという。

その他の記録については、内容が酷似しているが成立・書写年代不明の『女化騒動記』、伝承を聞きそのまま書き写した物に『視聴草』、『温故知新録』がある。

牛久助郷一揆の研究としては、大正五（一九一六）年刊の野口如月編『稲敷郡誌』が最も古い。ごく短いものではあるが、『牛久騒動女化日記』に基づいているように見える。記述の最後に「俗の首魁を逮

捕し何れも重罪に処せられ元の如く助合を得て無事に平定になりたり」と結んでいることから、義民の活動というより賊徒とみなしている論調である。

研究論文としては、野村兼太郎著『徳川封建社会の研究』昭和一六（一九四一）年刊の第二編第三章第三節「牛久宿助郷差村騒動」が最初である。野村は野口の記述を引用し、内容を検討した論を進めた上で、最後に天保五年写の「助合差村騒動御裁許」を紹介している。野村も野口同様、一揆は義民の「活動」ではなく「暴動」である。

戦後になり、茨城大学教育研究所編『茨城県郷土研究』昭和二八（一九五三年）刊「歴史近世」において、瀬谷義彦氏が茨城の百姓一揆一四件についてまとめている。その中で牛久助郷一揆の特異性について、「水戸藩などにはみられない助郷重課による」騒動であるとした上で、領主関係が複雑を極めていることや、鎮庄に近隣諸藩に援助を求めていることから、「鎮庄が容易ではなかったことを示すと共に、武士の威厳のみを以てしては、このころの一揆はも早取り締め得なくなったことを物語るもの」^⑤と、幕府に相当な危機感を抱かせたことを指摘している。この指摘は、その後の研究者の殆どが踏襲しているところである。また指導者の三人が判決前に相次いで病死した点について、「恐らく彼らは甚だしい拷問を受けたことであろう」と野口の文章を引用し、「怨をのんで死んだのではあるまいか」と結んでいる。

その後鈴木久氏編『牛久騒動女化日記―牛久宿助郷一揆の記録』昭和四二（一九六七）年において、「牛久騒動女化日記」「助合差村騒動御裁許」「常州村々百姓共徒党一件」が訳された。鈴木久氏は他にも

『女化原夢物語全―牛久宿郷一揆の記録（その二）』昭和四七（一九七二）年を発行し、「女化原夢物語」の訳を、昭和五四（一九七九）年発行『口訳常久肝胆夢物語―牛久宿助郷一揆の記録』において、町田市の無窮会図書館で林基氏によって発見された『東洋民権百家伝』の原本を訳している。

平成に入り、高橋実氏「龍ヶ崎市研究」第二号（一九八九年刊）『牛久助郷一揆と農民の世界』において、『視聴草』第五集収録の史料「常州河内郡牛久宿百姓一揆騒動一件」を紹介している。また高橋氏は、「牛久市史研究」創刊号（一九九一年刊）において、牛久助郷一揆の徒党・打ちこわしの行動を「一揆の作法」ととらえ、新たな視点で牛久助郷一揆の特殊性を明らかにしようとしている^⑥。

第二節 騒動の顛末

千住宿を起点とする水戸街道は、東海道や中山道などの五街道について三国街道などとともに重要な脇往還とされ、道幅三間の大道であった。千住から二九里一九町と短い街道であったが、江戸と御三家である水戸を結び、更に岩城街道と繋がって奥州の各地を連絡していた。

（図1）

牛久宿は水戸街道のほぼ中間にあたり、千住宿より水戸に向かって一三里二町離れた第八番目の宿駅である。更に二里水戸寄りの次の宿場が荒川冲宿である。戦国時代に牛久は既に宿として栄えており、一定の町場を形成していた。寛永六（一六二九）年に牛久藩山口氏の領地となり、寛永一〇（一六三三）年には検地を受けている。同時期に

参勤交代が制度化されたことで、水戸街道もこの頃に成立したと考えられる。

近世の陸上交通の基本は、宿駅から宿駅へという様に、宿駅ごとに旅人や物資を継ぎ立てる方式であった。宿駅は、街道に一里から三里ほどの

間隔で設定されたもので、常に人馬を備え置くことが義務付けられていた。宿駅は、一定の諸役免除を受ける代わりに、公用荷物の無賃継ぎ立てや、あるいは「御定賃銭」という幕府が定める運賃で輸送する義務が課せられていた。

牛久宿と荒川冲宿の場合は、他の宿場と異なり、両宿で人馬継ぎ立てを行う合宿となっていた。牛久宿は次の中村宿までの下り三里、若柴宿までの上り二里の継ぎ立てを行っていた。荒川冲宿は、牛久宿までの二里の片継ぎを行っていた。

水戸街道の宿場備人馬は、二五人と二五匹と定められていたが、元文五（一七四〇）年の助郷人馬の触れ当て吟味の結果「牛久村にて馬



（図1）『牛久市史料近世Ⅰ』牛久助郷一揆
P. 22より抜粋

五拾疋、沖村にて登片繼二附耆拾五疋、人足は右二從相勤^⑦」と定められた。

備え人馬で不足の場合は、定助郷村に充てることになっており、その定助郷村は天宝喜村ほか九か村で、それぞれ牛久宿七か村と、荒川沖宿三か村とに分かれていた。^⑧両宿ともに牛久藩山口家の領地で、牛久宿で八七〇石余、荒川沖宿二〇八石余の村高であった。

牛久助郷一揆の根本的な原因は、助郷役の増大に伴う宿駅の疲弊と助郷村の窮乏にあった。牛久宿は江戸時代中期以降、人口増などを原因として急速に窮乏が進んでいた。そのため、人馬継ぎ立ての負担を周辺地域の村々に分担させる様、助郷村の増加を幕府に祈願することが度々あった。

一方で、助郷に加えられた村が今度は疲弊していくこととなる。助郷村の増大により、宿駅よりも遠い村も指定されるようになる訳だが、遠い村は実際に人馬を出し、役を務めることは困難であったため、宿駅に頼み人馬を雇って勤める形が一般化をするようになる。代金納化である。それに伴い、雇い賃金の運用を巡る対立が生まれた。元々助郷役そのものが不定期で一定したものであったので、宿駅役人の恣意的割り当てが行われやすいものになっていった。その上雇い賃金の運用が絡み、その割り当て、運用の当不当をめぐる紛争が絶えず、宿駅と助郷村の対立が常態化していった。

窮乏する宿場が、その原因である人馬継ぎ立ての負担を軽減する対策を講じるとすれば、継ぎ立ての負担を他に肩代わりさせる方向となる。一般的にとられたのが、助郷村を新たに増設する「増助郷差村」

であった。牛久・荒川沖宿でも負担の増大と窮乏化の過程で、幾度となく差村願いを提出しており、天明七（一七八七）年には小坂村ほか一八一か村を一〇か年間助郷村に差し加えてくれるようお願いが出た。当然差村される側は反対したが、一月に小坂村他三五か村に現象はされたが認められた。差村期間は翌天明八（一七八八）年から一〇か年限りである。

天明八年当時、久野村の和藤治は、牛久宿で人馬請負稼業を営んでいた。助郷差村より雇い賃金を受けて継ぎ立てを行い、短期間に巨大な利益を得て富裕化していた。宿場役人と結託した和藤治が、人場雇い賃金の不正運用を行っていたのではないかと噂されていた。

最初の増助郷の年期一〇か年が過ぎたところで、再び牛久・荒川沖両宿の負担は増加し、再び窮乏に陥ることとなった。このため両宿は、再び増助郷の許可を幕府に願い出たが、なかなか許されることがないまま、牛久助郷一揆が発生する文化元（一八〇四）年を迎えた。

文化元年四月上旬、牛久宿の間屋飯島治左衛門は、牛久・荒川沖両宿の総代として「定助郷差分願」のため江戸に出て、勘定奉行所に対し、定助郷村の増加措置を希望する願書を提出した。この訴願は、総代として提出した飯島治左衛門の屋号「麻屋」にちなんで、「あさや願い」と呼ばれる様になる。ただし、この願書は牛久・荒川沖宿と定助郷村の利害を代表するものであって、差村側にしてみれば、負担増加を企てた願書であるから、「あさや願い」は歓迎するものではない。更にこの「あさや願い」には大変な費用がかかっていた。^⑨

八月上旬、勘定奉行所より呼び出しがあり、願い筋について詳しい

聴聞が行われた。聴聞の結果、「あさや願い」は取り上げられることとなり、出府目的を果たした治左衛門が牛久に帰着したのは九月十七日のことである。十日後の九月二十七日には村々宛に、寛永六年から享和三年までの十年間の年貢割り付け状と、今年文化元年の宗門人別五人組帳を揃えて、牛久宿へ持参するようにとの刻付急廻状が廻ってきた。触をだしたのは、村柄調査に廻っていた勘定奉行所の論所地改手代太田幸吉、同役鈴木栄助である。兩人は上総・下総・常陸・下野・伊勢・陸奥の論所地を改めるために派遣されたもので、勘定奉行の指示で助郷差村に上げられている村の村柄調査に廻ってきたのであった。

一〇月五日には、牛久宿に出役してきて牛久宿下目付兼帯大庄屋佐野佐衛門宅を本陣にし、検分業務にとりかかった。まず、兩宿の宿場役人、問屋達に「あさや願い」に基づいた今回の検分の趣旨を申し渡し、続いて「あさや願い」で差村に指定されている村々に牛久本陣へ出頭させる急廻状を出した。

翌六日朝、呼び出しを受けた村役人達は本陣に出頭し、検分出役人より「あさや願い」に基づいて村柄及び人別の調査を行う旨が申し渡された。これは、勿論定助郷村を増加させることを前提にした上で、個々の村がどれだけ人馬役を負担できるかを具体的に調べるためのものであった。

一方で、久野村の和藤治や阿見村の権左衛門らは、以前から内々で相談していた企てである、大助郷村の内より加助郷を増加させる画策を持ちだしていた。和藤治は、東郷助郷二五か村総代の由にて、今度の定助郷差村化による助郷負担は村方が困窮しているとして、負担を

広くかつ薄くするため、助郷村をさらに増加させる加助郷差村願書を提出していたのだった。この出願は後に明らかになるのだが、東郷の村々へは勿論のこと、同じく総代となっていた権左衛門にも願書提出の了解を得たものではなく、和藤治が独断で作成したものであった。願書を見た出役人は、勘定奉行所を経由していいものは現地では受け付けられないとして、奉行所の許可を得る様にと指示し、その上で願書へ出役人の添状を付けた。和藤治は早速出府して奉行所に願い出て、取り上げられたのだった。¹⁰⁾

この水面下での画策が村民達の疑惑を深めることとなった。一〇月一〇日、検分出役人は、牛久藩役人や牛久宿問屋の治左衛門らの案内により、「あさや願い」の指定村に前出の和藤治願いの加助郷指定村を加えた村々の村柄検分を始めた。廻村は東郷の柏田村から始められたのだが、出役人は和藤治の提出した東郷二五か村の願書について聞いただと、村役人からは承知していないという返答があった。二五か村の内、一、二か村位の触れ落ちはあるだろうと次の村に向かつても、願書は事前に承知していないと言う。このため、和藤治の独断による偽書という疑惑が生まれた。しかし、奉行所で一旦認可となったものであったため、偽物とされては建前上不都合であるとして、出役人はその件には触れずに村柄検分を進め、一三日までに廻村を終え、牛久宿へ帰って行った。

出役人は、廻村中村々に対して、村方の状況により助郷減免の措置を取る必要があるので、減免が必要な村には減免についての願書を提出するようにと申し渡していた。これに応じたのが、久野村、阿見村、

廻戸村などであつたのだが、そうなると和藤治と権左衛門が総代として提出した願書と異なる内容の願書が同じ東郷二五か村から提出される事態となつた。しかも、阿見村の組頭である権左衛門が、内容の異なる両願書に署名・押印していることとなつていたのである。

こうして出役人による事実関係の取調べが行われ、和藤治の独断による謀書・謀判が明確となつた。出役人は権左衛門に嚴重注意の上、久野村名主清兵衛に対しても咎めると共に、和藤治に願書の取り下げを伝えよと命じた。二人がその指示を和藤治に伝えたのだが、結局願書の取り下げが行われない内に一揆勢の結集が始まつたのであつた。この後も願書の取り下げを確認しないままにしていたことで、後に吟味され、処罰の対象となつた。

この状況下で、和藤治願いに關係していた阿見村の権左衛門は、先の助郷減免願書が棄却されたため、今度は差村から積立金を出させ、その貸付運用利金で人馬を雇い、助郷役を勤める方法を企画した。権左衛門は自村の村役人の同意を得、更に近村の村役人の同意を得るために各地で相談を重ねていた。しかし、村民達からは密談行為に映つたのだろう。和藤治願いが独断による企てであることは既に知れ渡つていたので、裏で和藤治と権左衛門が結託して助郷村を増やして不正を行つてゐるのではないかという疑惑が生まれたのである。村民達の宿場およびその關係者に対する反感の増大と、村役人らに対する疑惑の深化を背景に、このままでは助郷村に組み入れられ、負担増加で窮乏化するのには必至という危機感が強まつてきた。この状況下で、自分達の力で助郷減免をはかろうとする動きが生まれたのである。これが、

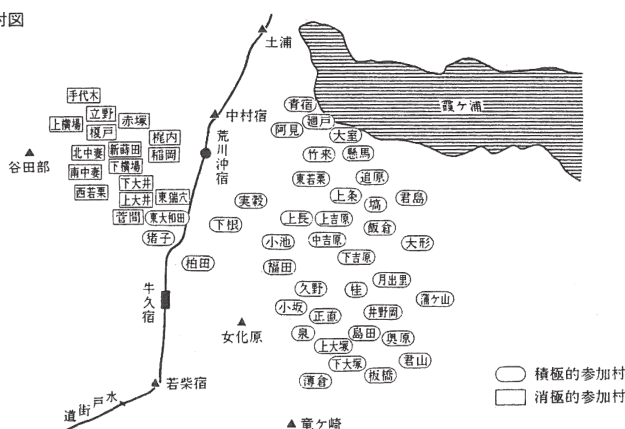
文化元年一〇月一八日から二二日に掛けて起きた、牛久助郷一揆に繋がつていたのである。

事件の発頭・頭取人は小池村の勇七、吉十郎と桂村の兵右衛門の三名で、三頭取と呼ばれるようになる。三名共、「田畑五、六十石宛、山林式、参拾町歩」^①所有していた村内でも上層の百姓で、四〇歳前後の壮年の者達であつた。このため、一定の指導性を持ちうると共に、村役人でなかつたために地位による制限がなかつた。

小池村の勇七が助郷減免の方法を考え、同村の吉十郎に相談をまず持ちかけた。二人は方策について相談を重ね、桂村の兵右衛門にも相談したが、有用な方策は浮かばなかつた様である。定助郷への組み入れは既に決定事項であり、事態はどの程度の助郷勤め高に設定するかという段階に來ていたからである。このため、この問題を關係村々全体で考え、減免運動の方策を考えるために、村々の百姓を集めようという結論に至つた様である。しかし、百姓らの勝手な寄合、特に村、領域を超えて集會することは徒党とみなされる可能性が高く、徒党は厳しく禁止されていた。徒党の発起人になるということは、嚴罰に処されることを意味する。

このため、発頭人の名前を伏せて、多数の平百姓を一時に集めなければならぬ。吉十郎の提案で結集を呼び掛ける「無名の貼り札」を村々の高札場に掲げる方法を実行することとなつた。一七日の夜、参集を呼び掛ける張り札が村々の高札場に掲げられた。これに応じた平百姓達は、一八日朝から結集しはじめると、徐々にその数を増やしていった。不参の村へは参集の催促状が出され、最終的に女化稻荷のあ

牛久助郷一揆参加村図



(図2) 『牛久市史料近世Ⅰ』牛久助郷一揆P. 30より抜粋

る女化原に結集した平百姓の数は、五五か村、六〇〇人余りに上ったとされる。(図2)

村民が女化に集合している間、村役人層が手を打たなかった訳ではない。上長村の名主長兵衛や追原村名主嘉右衛門の兩人が、緊迫した騒動勢の中で女化原へ出向き、必死になつて鎮めようとしたのだが、拒否されて終わっている。

更に牛久宿も一八日には動向を把握していた様である。注進を受けた牛

久陣屋では、まず幕府検分出役人が宿泊している本陣に家臣を急派し、同時に騒動勢の様子を探るため、家臣二人を女化原に派遣している。知らせを聞いた検分出役人は、牛久藩士や手勢で本陣を固めさせ、近郷の元締的な名主を呼び出して、鎮静化を命じたのであった。

検分出役人の名により、小坂村の名主忠左衛門らが騒動勢を鎮める

ため女化原にやってきて、兵右衛門らに対し、鎮まる様に説諭した。これに対し、兵右衛門、勇七、吉十郎はひとまず説諭を受け入れる姿勢を見せ、後程牛久宿に出向く旨を述べ、ひとまずこの場を収めた。

明けて一九日には、派遣の名主らの報告や牛久藩士の偵察報告が来たり、大規模であると認めざるを得ない段階に進んでいた。この時点で検分出役人は江戸へ早馬で注進状を送った上で、同時に周辺の土浦藩、谷田部藩、仙台藩に対し、大事に至った場合は援兵を派遣するようという依頼の使者を出した。

続いて、助郷差村の村役人宛に、至急牛久宿の本陣に出頭すべしという急呼び出し状を八つ時に出した。しかし、当日この呼び出しに応じた村は一村もなかった。

女化原に集まった平百姓達は次第に暴徒化しつつあった。この混乱下にあつて、改めて兵右衛門らが指導者となり、平百姓達を村毎に組分けして騒動勢にまとめ上げたのである。ついに騒動勢は打ちこわしを決議し、女化稲荷に神護の祈願を行ってから、打ちこわしに向かつていった。

一九日は人馬請負人である久野村の和藤治の家を、翌二〇日には牛久宿問屋の麻屋治左衛門の家屋を打ちこわした。ここで注目すべきことは、牛久宿の打ちこわし対象は麻屋のみではなく、佐野屋、入江家も対象にされたことである。つまり、騒動勢の打ちこわし対象は麻屋個人ではなく、牛久宿そのものであり、その代表として宿役人や問屋を打ちこわしの対象としていたのである。実際には佐野屋、入江家

は打ちこわされることはなかったのだが、これはそこに土浦藩兵や牛久藩が駐留していたからである。二二日には阿見村の組頭の権左衛門の居宅と蔵が徹底的に打ち壊された。女化原に引き返す途中で鎮圧兵が接近している知らせを受けた一揆勢は、直ちに解散したのであった。

騒動後、勘定書留役二名が幕領の上郷出張陣屋に派遣され、そこに取締本部を置き、広範囲の探索を行わせたため、一〇〇人余りが逮捕され厳しい取り調べを受けた。

騒動主導者らは江戸伝馬町へ送られた後、文化二年正月に三名の頭取は相次いで獄死した。そしてこの年の八月、頭取死罪、惣百姓過料という裁決が下った。

騒動の目的である助郷差村化の免除はどうなったのかについては、記録により異なる表現がされているが、共通しているのは、助郷差村は免除されなかった、ということである。騒動勢の要望は通らなかったが、定助郷という無期限の差村ではなく、またもや一〇カ年という期限付きでの助郷差村となった点は一定の成果といえるかもしれないが、騒動参加村の大部分は結果的に増助郷差村に組み込まれることになった。

宿場側の助郷差村化、不当割当、不正勘定など助郷問題の多くは、助郷制度そのものの矛盾が生み出したものである。不正でなくとも負担増加に対して疑いにかかることも当然のことである。人馬代金不正運用についても、度々訴訟となっていた。ところが今回対抗していた相手は、助郷負担に関わる人間、和藤治、治左衛門、権左衛門の三名であった。そもそもの助郷制度自体、またそれを作りだしている幕府

については思い至らないため、牛久陣屋を襲うまでもいかなかったとも見える。

第二章 牛久助郷一揆の影響

文化年間と言えば、牛久助郷一揆にとどまらず、関東の各地で百姓による闘争が頻発していた時期である。特に幕府領、旗本領など各種領地が入り組み、錯綜する地域でその傾向が見られる。¹²牛久助郷一揆の翌年、文化二（一八〇五）年、関東取締出役がおかれている。その中でも牛久助郷一揆にはどんな影響があったのか。

多くの議論は、江戸からほど近い水戸街道で、しかも勘定奉行所役人の滞在中に、数千人にのぼるいわゆる「平百姓」に、助郷差村に意義を申し立てる徒党を組ませたことに対して特異性を見出している事が多い。また、徒党から打ちこわしまで実行させたにも関わらず、武力鎮圧が出来なかったことを論点にすることもある。

この二つの論点は、百姓一揆を百姓と幕府、もしくは被支配層と支配層の対立を前提にしている訳だが、牛久助郷一揆についてはこの対立に当てはまるとはいえない。

三頭取を中心にとまとった百姓達が対峙していたのは、久野村の和藤治と阿見村の権左衛門、牛久宿問屋の飯島治左衛門であり、幕府や制度そのものに対してではない。多くの助郷に関する当時の一揆や打ちこわしは、その助郷制度そのものに対する抗議であることが多いので、対立としては牛久宿に向けられていた。牛久助郷一揆については、この点が特異な存在と言える。

また、参加した村々で事情が異なっていたことにも注視する必要がある。図2の通り、水戸街道を挟んで東側を「積極的参加村」、西側を「消極的参加村」として、地理的要因や村落間の社会的な関係、助郷負担上の関係について語られていることが多い。助郷に加えられる村は負担が増えるので反対するだろうが、既に助郷村に組み込まれている村からすれば負担が減るのだからむしろ歓迎されることである。今回の助郷騒動は、組み込まれる前に助郷減免を図ろうということから発しているので、参加した村々すべてが同じ方向を向いていたと言いはない。

一揆や騒動、打ちこわしに対し、周辺藩へ鎮庄の応援を頼んではいるが実際武力をもって鎮庄とならなかったのはよくあることで、徒党を組んだ百姓に対し、武力を持つて鎮庄をするということは殆どしないのが現状であった。前述の鎮庄に近隣諸藩に援助を求めているという根拠となった「尤飛道具相用不苦候事」¹³とは、勘定奉行に対し、用番老中青山下野守忠裕が知らせた文書にあるが、実際に討伐のため発砲することが目的で出されたものではなく徒党の解散の為に慣習的に用いられた空砲であろう。

幕府の側から見た牛久助郷一揆が、前述の日記類から察せられる程大きなことにとらえられていなかった一例を挙げる。

勘定奉行石川忠房が、騒動に関係した阿見村に知行所を持つ旗本久永氏に対し当てた書状に見える発言を挙げる。騒動終息後間もない文化元（一八〇四）年一〇月二九日付で書かれた書状である。

（不快見舞い、蝦夷地より塩鯨進呈のお礼に続き）又々此程御知行所辺百姓共騒立、阿見村組頭権左衛門宅をも打崩付哉二相聞候、先ハ早速相鎮申候、人氣悪敷所ニて困り申候物ニ御座候¹⁴

書いた石川は、関東の治安問題に関心を持っていた実務派吏僚である。任期の後半には化政取締改革を主導していく勘定奉行であった。この人物ですら、見舞いや贈答のお礼のついでに筆を加えた程度の「困り申候物」の認識であった。

また、牛久助郷一揆に鎮庄出兵した佐倉藩年寄の書状に次の文面がある。

御人数引取方之儀（中略）三番手より先二引取候方御人数混雑も致申間敷、其上此度之儀は、事立候騒動杯と申程之儀ニも無之候得は、御番頭殿り致し候て引取候ニも及間敷¹⁵

佐倉藩といえば、義民佐倉宗五郎の伝承が根付く土地柄である。この頃は、宗五郎の事件後しばらく転封していた堀田家が、再び佐倉藩に入封していた。天明三（一七八三）年の飢饉以降、強訴や村方騒動も起こしているが、鎮庄した後、宗五郎を口ノ明神に祀り、徳満院の号を贈って法要を行っていた時期である。牛久助郷一揆が起きた翌文化二年は、堀田家が宗五郎の子孫を見つけ出し、田畑を与えた年である。ある意味、騒動の首謀者とその子孫を保護することで、不満を抱える同じ百姓達の暴動化を防ぐうとしていたともとれる。

何をもつてして彼らがいうところの「事立候騒動」たりうるかは、手紙を書いた個人の主観もあるのかもしれないが、少なくともこの時期の江戸周辺の各藩には同規模の徒党から始まる騒動は、ある種定番化していたのかもしれないととれる。佐倉藩に関して言えば、義民佐倉宗五郎を有名にした歌舞伎「東山桜莊子」は嘉永年間に入ってから上演されているが、芝居を観に江戸へ向かうことを禁じることなく、藩の行事として法要も続けている。藩として徒党を組むことは禁じる立ち位置は変わらないだろうが、小事に動じる姿勢を見せないことも、藩政には必要であつたのだろう。牛久助郷一揆への出兵に関しては、「常州河内郡女化原一件大略」と題する記録で「紀氏雜録・続八」に収録されており、牛久鎮庄出兵に関わる幕府とのやりとりや、出兵から帰城までの佐倉藩の動きを具体的に記録している。小事といえども何もしなかつたわけではないということがそこから分かる。

文化六（一八二三）年、打ちこわしを受けた牛久宿問屋の麻屋治左衛門が三頭取の供養塔となる石塔を建立した。表立って「供養」とする訳にいかかつたのであるう、道標を兼ねており、戒名の上石塔の四面には東西南北の方向が刻まれた。本来、方角と行く先だけ記されるのが当時の道標であつたが、この石塔には墓碑銘が記されていた。菩提を弔う意味を込めたこの供養塔の建立は、地域の百姓達の反宿場・反麻屋感情の緩和をねらつたものであろうことは言うまでもない。騒動後も宿問屋・役人として牛久宿を代表していた治左衛門としては、同様の事態を避けたい狙いもあつたのだろう。

頭取を二名を出した小池村では、嘉永四（一八五二）年二月、焼失

した地藏院の再建と、二人を弔う永代施餓鬼を行うために万人講修行を開催したいとして、本寺法泉寺へ願ひ出た。願書には、「御公辺之奉蒙御咎を、既二重キ御裁許ヲ奉請、空罷成候処、凡五拾ヶ年二相成候得共、誰有て年季筋等いたし呉候ものも無之、何共歎敷奉存候間、今般永代施餓鬼取立申上度候」とある。半世紀を経て、ようやく供養に辿りついた積年の思いが込められている様にとるのは極論であろうが、少なくとも小池村の人々が勇七、吉十郎を否定的にみていたわけではないということだろう。現在でも二名は共同墓地に眠っている。

勇七の戒名は「還著道本信士」、吉十郎の戒名は「唯願本誓居士」である。残念ながら兵右衛門の墓は発見されていないが、治左衛門が立てた碑文には兵右衛門に「明普道鏡信士」と刻まれていることから、他の二名の戒名も墓碑と同様であるので、当時つけられた戒名も同じだと考えられる。

彼らが義民として顕彰されるに至らなかつた理由については、助郷制度そのものの矛盾を打開していないことや、幕府の危機意識について語られることはあるが、更に検討してみたい。

騒動の翌年文化二年八月一日に「常州村々百姓共、徒党二及候一件再応吟味之上」¹⁸で裁許状が出された。この時点で頭取三名は獄死していたので、当時の徒党処分原則である頭取死罪と同様の状況である。また、内部からの探索協力を促すのも原則であるから、打ち壊された阿見村組頭の権左衛門は過料の上、探索協力や注進のため御免となった。

この三名の頭取の獄死については、拷問の上死亡後に「家内屋さが

し致候処¹⁹」死亡した三名の家から張り紙の下書きなどの証拠書類が発見されたとして、これを作為的であるとする論もある。しかしながら、徒党だけではなく当時の捕縛後は、取り調べの際に獄死することが常であり、自白の強要があったとしても「取り調べ中に勘定奉行所側が期待する証拠や明確な自白がえられなかったことをしめしている」程重く捉えていないのではと考える。というのも、この地域ではこの後も籠訴が数回行われており、その度に同様に対応している余裕は既になかったのではないだろうか。

小池村で、焼失した地藏院の再建と頭取二名を弔う永代施餓鬼を行うために万人講修行を行った嘉永四年こそが、江戸中村座で佐倉宗五郎の伝承を「東山桜莊子」として大当たりした年であるので、義民が流行したのではないか、それにより供養を言い出しやすくなったのではないだろうかと考える。牛久助郷一揆が記録として残されたのは事件直後からであるのは前述の通りだが、史料が豊富である割にこの後訪れる義民の流行に牛久の三頭取が「乗れなかった」のは、宗五郎とは異なっていたからであろう。宗五郎が対抗する相手は、老中経験のある堀田家で、処刑は磔刑であった。その後堀田家に続いた不幸から祟りを噂される様な伝承からしても、勧善懲悪のストーリーとして仕立てやすいものであった。一方牛久助郷一揆は、対抗する相手も幕府の体制そのものではなく、一揆に加担した村間の関係性も複雑で、ストーリーとしては作りにくいものであった。また、三頭取が祟る様な伝承も残らず、一揆そのものも広がらずにひそかに受け継がれているものだった。宗五郎も三頭取も比較的確福な名主であったことは共通

しているが、取り上げられやすかったのは人物そのものや一揆の規模よりも、歌舞伎や劇になりやすいストーリーであったかどうか、単純明快であったかどうかにかかっていたように考える。

おわりに

牛久助郷一揆が大きくとりあげられたのは、小室信介の『東洋民権百家伝』の第三秩に掲載されたことによる。小室が牛久助郷一揆を取り上げたのは、牛久助郷一揆の顛末を記した『常久肝胆夢物語』を手に入れたことによる。

明治一六（一八八三）年に出された『東洋民権百家伝 一名日本義人傳²¹』は、民権家でもある小室信介が、地域の義民伝承等を民権家が起こした出来事として集積し、紹介したものである。構成は初秩、第二秩、第三秩がそれぞれ上・中・下に分かれており、冒頭に一揆や騒動等において主役となる人物名が出された後、伝承の内容が続く。一部には、伝承の最後に、それに対する小室の考察という構成になっている。明治一三（一八八〇）年から準備され、三年後の明治一六（一八八三）年八月に初秩が刊行された後、『東洋義民百家伝』と題名を変えて第二秩、第三秩まで刊行されている。

明治一六（一八八三）年九月四日付「自由新聞」の付録において、小室信介が「四方の有志諸君に懇請す」と百姓一揆のリストを挙げて資料収集を募集した際、そのリストの中に「文化元年十月の牛久荒川両宿助郷のこと」があったのだが、この記事を見た常陸村信太郎追原の小松沢嘉右衛門直信という人物が、『常久肝胆夢物語』を書写した

上、小室宛に直参したことから、第三帙に収録されることとなった。

小室自身がなぜ牛久助郷一揆について知り得たかは不明であるが、牛久助郷一揆が、ある程度の知識層であれば知り得る程度の知名度はあったことが分かる。前述の通りその後も同地域では籠訴や徒党が繰り返されていた訳だが、敢えて牛久助郷一揆を取り上げたのは、残された記録が豊富にあったからではないか。

『東洋民権百家伝』は第四帙まで発行が予定されており、明治十六年の発行以降も取材が続けられていたが、小室自身の外遊が決まったために発刊されることはなかった。第四帙のために準備していたという原稿の取材に、他の地域の義人追悼会に訪れていた様子なども描かれていた。この義人追悼会を主催していたのは民権家達であるが、当時は他にも民権葬儀や民権講談なども開催していた。

このように、明治に入り百姓一揆の義民達は自由民権運動の民権家として利用されていくこととなる。

義民が民権運動に取り入れられていくにあたり、代表的な人物といえば佐倉宗五郎だろうが、小室は同著初秩冒頭でしか取り上げていない。目的が宗五郎に匹敵する人物の発掘であるからだが、牛久助郷一揆は宗五郎の事件に匹敵するものではなかったということであろう。民権運動が活発な地域であれば取り上げられることもあったろうが、水戸中心に発展した茨城県下では、距離がある牛久ではそれも叶わなかった。

各地に義民伝承は数多くあるが、すべてが民権家として取り入れられた訳ではない。顕彰活動は様々な形で続けられていくが、時に滅私

奉公の象徴として、時に忠君愛国の先人として、様々な形で利用されることがあった。牛久助郷一揆ではそういった発展がみられなかったが、同様に埋没していった義民は少なくないということである。

〔注〕

- (1) 同事件は、「牛久助郷一揆」「牛久騒動」「牛久宿助郷差村騒動」「常陸国天領他文化元年助郷一揆」「常陸国河内・信太郎幕領等打ちこわし」等呼び方があるが、本論は牛久助郷一揆で統一する。明治十六年の初版は『東洋民権百家伝一名日本義人傳』であり、第二帙と第三帙は『東洋義人百家傳』に名称を変更している。
- (2) 『牛久市史料』近世Ⅰ「牛久助郷一揆」一九九四（平成一四）年35頁
- (3) 「常久肝膽夢物語」と表記されることもあるが、本編は「常久肝膽物語」の表記で統一する。
- (4) 前出『牛久市史料』15頁上段
- (5) 前出『牛久市史料』15頁下段
- (6) 近世史研究叢書8『助郷一揆の研究―近世農民運動史論―』高橋実著 岩田書院二〇〇三（平成一五）年 145頁～199頁
- (7) 「助郷被仰付御請書写」天明八年五月（茨城県牛久市牛久・飯島久美子家文書、以下飯島家文書と略称。本文は前出『牛久市史料』近世Ⅰ収録。
- (8) 前出 飯島家文書。本文は前出『牛久市史料』近世Ⅰ収録。
- (9) 『牛久市史近世』牛久市史編さん委員会 二〇〇二（平成一四）年277頁
- (10) 阿見町・湯原家文書。前出279頁。
- (11) 前出 285頁。
- (12) 前出 309頁。
- (13) 国文学研究資料館史料館蔵土屋家文書。本文は「牛久市史料近世Ⅰ牛久助郷一揆」56頁による。

- (14) 『千葉県史料』一九八五（昭和六〇）年収録「紀氏雑録続集」内「常
州河内郡女化原一件大略」
- (15) 『牛久市史近世』牛久市史編さん委員会 二〇〇二（平成一四）年
314頁
- (16) 「紀氏雑録」は「紀氏雑録集」としてまとめられ、「千葉県史料」に
収録されている。
- (17) 前出『牛久市近世』318頁
- (18) 前出301頁
- (19) 前出『牛久市近世』301頁
- (20) 前出301頁
- (21) 明治一六年の初版は『東洋民権百家傳一名日本義人傳』であり、第
二秩と第三秩は『東洋義人百家傳』に名称を変更している。

（おおくぼ きょうこ 文学研究科日本史学専攻博士後期課程）

（指導教員：青山 忠正 教授）

二〇一五年九月三十日受理